

令和元年6月4日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02437

研究課題名（和文）後期ヴィクトリア朝イギリスにおけるファッションと消費のダイナミズム

研究課題名（英文）Dynamism between Fashion and Consumer Culture in the Late Victorian Era

研究代表者

十枝内 康隆（TOSHINAI, Yasutaka）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80359489

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、後期ヴィクトリア朝のイギリスにおいて、ファッションのような消費文化が男性のアイデンティティの構築や再構築にどのような影響を与えたかを考察した。ウォルター・ペイター、オスカー・ワイルド、マックス・ビアボウムといった同時代の唯美主義やデカダン運動と関係する作家たちの文章を分析し、それまで「女性的」とみなされてきた消費行動が、男性のジェンダーアイデンティティを揺るがしながら、次第に変容させていくプロセスを検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、従来の男性性研究の成果を踏まえたうえで、文学研究に「消費行動」の視点を取り入れ、また、ファッション史や消費文化史・消費社会史といった諸分野と文学研究の融合を試みた。これにより後期ヴィクトリア朝イギリス文学研究の新たな可能性を拓くことができた。また、消費行動と男性のジェンダーアイデンティティ構築との関係を考察することは、さまざまな分野への応用が期待される基礎的研究であり、その点においても意義深いものであると言える。

研究成果の概要（英文）：This study has researched how consumer culture, especially fashion culture, in the late Victorian era influenced the formation and transformation of male gender identity. I have analyzed the works of writers associated with the aesthetic and decadent movements in the period such as Walter Pater, Oscar Wilde and Max Beerbohm, and examined the process in which consumptive behaviours regarded as "effeminate" gradually destabilized and changed the concept of male gender identity.

研究分野：イギリス世紀末文学，詩学および批評理論

キーワード：ヴィクトリア朝英文学 ジェンダー ファッション 消費文化 ウォルター・ペイター オスカー・ワイルド マックス・ビアボウム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

1970 年台に脚光を浴びたボードリヤールのポストモダン的な消費社会学を踏まえたうえで、消費をめぐる基礎的研究が発展し、なかでも 19 世紀から 20 世紀にかけての男性ファッションを、消費社会や消費行動と関連づけながら論じる研究が次第に注目を浴びつつある。その嚆矢となったのがファッション史家 Christopher Breward が発表した *The Hidden Consumer: Masculinities, Fashion and City Life 1860-1914* (Manchester University Press, 1999) である。これは 19 世紀後半から 20 世紀初頭までのイギリスを舞台に、規範的マスキュリティとファッションを媒介としたセクシュアリティ・階級表象とのあいだの関係を論じ、男性ファッションと消費をジェンダー表象と関係付けた研究の先駆けとなった。また、Breward らの成果を受けて社会史家である Laura Ugolini は *Men and Menswear: Sartorial Consumption in Britain 1880-1939* (Ashgate, 2007) を出版し、より詳細に 19 世紀後半から 20 世紀にかけてのマスキュリティと消費社会史とを結びつけることを目指した。Ugolini はそれまでのマスキュリティ研究が、男性性を精神的、身体的側面から解き明かして行くことばかりに重きを置いていたことを是正すべく、衣服の売買といった男性性を脱構築する潜在的な可能性を持った行動様式に注目し、男性服飾品の生産と消費をめぐる時代的変遷のなかに、当時の男性たちの生活とアイデンティティの形成を見ようとした。

一方、越境しながら男性性を侵犯しようとする契機としての女性性をヴィクトリア朝の男性作家に見ようとする研究はこれまでも盛んに行われてきた。本申請者もこれまで平成 18-20 年度基盤研究(B)「19 世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティクス」(研究代表者: 玉井アキラ, 研究課題番号: 18320049)や平成 21 年度-24 年度基盤研究(B)「後期ヴィクトリア朝イギリスにおけるマスキュリティと友愛の政治学」(研究代表者: 玉井アキラ, 研究課題番号: 21320057)に研究分担者として参加しながら、その研究を行ってきた。ただ、いまだ男性性に対して越境を試み、それを侵犯しようとする契機としてのファッションや消費行動を論ずる十分な機会がなかった。なお、Breward の研究はあくまでもファッションと消費行動が中心となっており、副題に示されているようなマスキュリティや文化に対する考察は実際には必ずしも十分でない。また、Ugolini の研究は広汎にわたってはいるものの、文学テキストを十分に扱いきっていないことなどが惜まれる。

## 2. 研究の目的

ヴィクトリア朝後期イギリスにおけるファッションと消費、およびジェンダーの関係について、以下の作家たちによる言説を中心として同時代の資料を分析し、いかにしてファッションや消費行動といった「女性的」な契機が男性性に対して越境を試み、「男性的」な要素を侵犯していくのかを検証しつつ、それが男性の生活やアイデンティティ構築に与えた影響を解明する。具体的には以下のプロセスを踏みつつ研究を進めた。

1) ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティを始めとするラファエロ前派の諸作家、ジョン・ラスキン、ジョン・アディントン・シモンズ、ウォルター・ペイター、オスカー・ワイルド、アーサー・シモンズ、オーブレ・ピアズレー、マックス・ピアボウムおよび『イエロー・ブック』その他の雑誌に寄稿していた群小作家たちのテキストにおける男性ファッションと消費行動をめぐる言説について分析する。また、実生活において彼らがファッションに対しどのような態度を取っていたか、また、いかなる消費行動が見られたか等についても、書簡や伝記的資料を精査することで検証する。

2) 同上の作家たちのテキストにおいて上記の要素がどのようにジェンダーに関わる言説と相互作用を繰り広げているのか、また、いかにしてそれらの要素が男性性を絶えず越境し侵蝕しようとする契機として機能しているのかを分析する。さらに、同時代の新聞・雑誌記事等を精査することによって、ファッションや消費をめぐる繰り広げられる男性性と女性性のポリティクスについても検証する。ことに 19 世紀前半のダンディズム時代に比較して、ヴィクトリア朝後期において男性とファッションをめぐる関係性がどのような変容を遂げつつあったのかを明らかにする。

3) 文字媒体のみならず、ヴィクトリア朝後期におけるファッションや消費行動に関する画像その他を収集分析することにより、文学テキストを中心とした文字媒体には十分に表現され得ない要素、また、文字媒体による制度からは漏れざるを得なかった要素についても明らかにする。最終的には、これらの研究によって得られた成果を消費社会史の最新成果に照らし合わせつつ相互に補完を図る。

本研究は、先行研究の資産を継承発展させながらも、近年次第に注目を集めつつある消費社会史研究の成果を援用しつつ、ヴィクトリア朝後期における男性性研究に新たな一石を投じようとするものである。文学テキストを中心的な問題として、政治史、社会史に依拠した男性性解明の動きは、ホモエロティシズムのベクトルを辿ろうとするクィア研究の先鋭的な活動に力を得て、これまでに多くの意義ある業績を積み重ねてきた。しかしながら、消費活動、とりわ

けファッションというエフェメラルな現象を蕩尽しようとする活動に重点を置いた研究は内外においても極めて稀であり、これによって得られる成果は、ヴィクトリア朝後期の男性性概念を新たな角度から語り直すものとして非常に有意義なものである。

### 3. 研究の方法

本研究は以下の全体方針に基づき3年間にわたって研究を継続した。

- ・国内および海外での積極的な史資料収集
- ・国内外の学会・研究会への参加
- ・国内外における関連分野の研究者との連携・協力

#### 史資料収集

本研究の対象となる史資料は、狭義の文学テキストや研究書に加え、ヴィクトリア朝英国において出版された新聞・雑誌、さらには活字媒体以外の図像資料等多岐にわたる。これらを収集・精査するため、英国等に出張し、精力的な収集を行った。出版物や原稿等については大英図書館ならびにロンドン大学図書館を活用するが、図像資料についてはファッション関係の史資料を膨大にコレクションするヴィクトリア&アルバート博物館ならびにロンドン博物館を訪問し収集を行った。また日本国内においても神戸ファッション美術館等において収集を行った。

#### 学会・研究会への参加

当該分野の研究に関しては、日本国内における全国規模の学会として日本ペイター協会、日本ワイルド協会、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、消費文化史研究会等の諸団体があるが、これらの学会が開催する年次大会やセミナー等に可能な限り出席し、同じ分野を対象として研究を行っている研究者諸氏との交流を深め、その成果を分かち合うことができた。

#### 国内外における研究者との連携・協力

本研究代表者は、これまで平成18-20年度基盤研究(B)「19世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティクス」(研究代表者:玉井アキラ,研究課題番号:18320049)や平成21年度-24年度基盤研究(B)「後期ヴィクトリア朝イギリスにおけるマスキュリニティと友愛の政治学」(研究代表者:玉井アキラ,研究課題番号:21320057)に研究分担者として参加しながら、その研究を行ってきた。そこで後期ヴィクトリア朝イギリスを対象とする多くの研究者の知遇を得ることができた。本研究課題の遂行においても、対象を同じくする多くの研究者の助言や協力を得つつ研究を遂行することができた。本研究課題の遂行においては、特に平成27年度-29年度基盤研究(C)「男性性の構築と軍国主義精神の発揚 19世紀後半から20世紀初頭のイギリス文学周辺」(研究代表者:野末紀之,研究課題番号:15K02306)の研究グループと定期的に合同研究会を開催し、本研究課題に関わるさまざまな問題について示唆や刺激を受けることができた。

### 4. 研究成果

本研究代表者はこれまでジェンダー研究や、Jonathan Dollimoreらが先鞭をつけたクィア批評の方法論に依拠しつつ、Linda DowlingやRichard Dellamoraの先行研究を援用して、ウォルター・ペイターにおける同性愛的欲望のダイナミズムを解明することを目標としてきた。そこで得られた後期ヴィクトリア朝におけるジェンダー、セクシュアリティに関する成果を援用し、本研究課題においてはヴィクトリア朝後期におけるマスキュリニティの問題を、「ファッション」「消費行動」といった視点から捉えなおし、これらの要素がどのように男性のアイデンティティ構築に影響を与えたかという問題を、主として文学テキストの分析を通じて解明しようとした。分析の対象とする作家も、ウォルター・ペイターやオスカー・ワイルドのような、当時華々しく活躍し、多くの作家たちに影響を与えた人物のみならず、ファッションや消費行動について多くの発言を行っているにも関わらず、いまだ十分な研究がなされているとは言い難いマックス・ピアボウムや、さらにはジョン・グレイのような世紀末のマイナー詩人を含め、包括的にこの問題を捉えようとした。

ヴィクトリア朝後期のイギリスは、その社会構造において中心的な役割を担っていた中流階級における家父長的リスペクタビリティが一見したところ安定した強固さを保ち、また、それをより大きな枠組から支えていた帝国主義的ナショナリズムの絶頂期にあったが、それに異議を唱え土台を侵蝕しようとする動きも同時にその力を強めつつあった。本研究においては、ファッションや消費行動といった「女性的」な契機が男性性に対して越境を試み、「男性的」な要素を侵犯し、次第に変容させていく過程を再検証することができた。そして、ウォルター・ペイターのような作家が、ボードレール等の影響下を受けつつ、「女性的」な要素に対する批判を精神的昇華によって回避しようとした戦略や、ワイルド、ピアボウム等が「女性的」契機をあえて男性性の内部に取り込みつつ男性性概念そのものの再構築を狙おうとした戦略について解明した。また、あわせて、唯美主義者の性的幻想がどのように男性のジェンダー・アイデンティティに影響を及ぼすのかについても若干の考察を加えることができたが、この問題について

はさらなる検討が必要と考えられる。

また、大阪市立大学・野末紀之教授を代表者とする研究グループとの交流を通じて、当時の保守的文化人が唯美主義に対して「病的」「女々しい」という批判を浴びせたことに対抗して、唯美主義陣営がどのような戦略を用いたのかという問題について、広汎で貴重な示唆を受けることができた。同グループとは今後も引き続き研究交流を進めていきたい。

なお、これまでの研究において、「男性性の理念・規範」の形成とその揺らぎ、またそれらと密接に関連するファクターとしての「女性的契機」としての「ファッション」や「消費行動」を分析するなかで、極めて「男性的」かつ排他的でありながら、「ファッション」や「消費行動」とも深くかかわる「ダンディズム」の問題が次第に浮上してきた。ポー・ブランメルに象徴される摂政皇太子期のダンディズム第一世代の後、カーライルのような作家たちの批判を経て、さらにはフランス象徴派詩人の影響を受けつつ、ヴィクトリア朝後期においてどのようにダンディズム概念が変容しまた構築されたかを問うことが、当時の男性性を解明するために不可欠であると考えに至った。ダンディズムをめぐるこれらの問題については、引き続き研究を進める予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

十枝内康隆, ダンディとしてのウォルター・ペイター 序説, 北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編), 査読無, 第67巻第2号, 2017, 17-25  
<http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8172>

十枝内康隆, 後期ヴィクトリア朝における人工美とエロティシズム ジョン・グレイの「理髪師」をめぐって, 北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編), 査読無, 第69巻第1号, 2018, 45-53  
<http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/9881>

〔学会発表〕(計2件)

十枝内康隆, 吉田健一とペイター, 日本ペイター協会, 2017  
十枝内康隆, キプリングを嫌った男 マックス・ピアボウム, キプリング協会, 2019

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

十枝内康隆, マックス・ピアボウム「ディミニユエンド」翻訳と注釈, ペイター論集, 査読有, 第7号, 2019, 47-58

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。